このように、童話・お話への科学的アプローチを含め、いたるところで既成のあり方を超えようとしたところに、子ども学への芽を児童文学、とくに童話学の側面から育てようとした上澤の役割を評価できるし、またそのような挑戦に彼の真骨頂もみられるのである。その点で、彼はこれまで適切に評価されてこなかった面を持っている人でもある。

（以下、次号に続く。参考文献類は次号に一括掲載）

表紙によせて

白梅学園大学　准教授　**杉山 貴洋**

「地域と子ども学」創刊号の表紙は、東村山の子育て支援の特集をうけて、ころころの森プレイルームの写真を掲載しました。ころころの森は、本学が運営委託を受け、空間デザインを私が担当しています。プレイルームにあるシンボルツリーをはじめ、どんぐりのロゴマーク、８つの部屋のマークなどのデザインをしました。

ころころの森は「みんなでつくるセンター」として、市民やNPO、大学など様々な人の関わりでつくる子育て総合支援センターです。そのため、柔らかく親しみやすいデザインを心掛け、様々な人の関わりが、空間にいかされるような試みをしています。例えば、シンボルツリーには、季節に合わせてワークショップで作られた子どもたちのモビールが飾られます。子どもたちのアートセンスが、ころころの森の空間を彩っているのです。何気ないプレイルームのスナップ写真のなかにも、地域の関わりがあることを感じて頂ければと思います。